



六甲の谷間に見事に咲いた山桜らし

六甲山の魚屋道

黒部 亨 〈作家〉



丸太で架設された人工歩道？を登る。腐ると危ないのだが。

神戸と有馬とは地理的には近距離にありながら、六甲山（九三二メートル）という障壁にはばまれて、その交通は古くから不便不自由をよぎなくされてきた。正規の往還としては東西二つの迂回路——すなわち平野から小部峠・箕谷を経て東行する西廻りルートと、西宮から生瀬を経て有馬街道を西行する東廻りルートがあった。このうち、生活必需物資の輸送路として、もっぱら東廻りルートが利用されていた。

しかしこのルートには、一駄につきいくらかという通行税の取立場所があり、この税の支払いをめぐって、通行者と地元との間でたびたび争論が起った。そこで行人や運送業者たちは、はなはだ危険で困難ではあるけれども、通行税のない六甲山中を横断する秘密ルートの開発を考え、その一つとして表裏六甲の最短ルートとなったのが住吉側沿いの住吉道である。俗にこれを「魚屋道」（有馬では「とと屋道」と言っている）と称したのは、大石や御影の浜で獲れた鮮魚を、六甲越えに有馬へ輸送したからで、別名「真道」とも呼ばれている。

住吉川は六甲山頂から東灘区中央を南下、白鶴美術館観音橋、水道橋、灘高校から魚崎を経て海に注いでいる最近ではアユの放流で話題をまいたが、昔は川沿いに無数の水車小屋があつて、独特の風景をみせていた。水車小屋は灘の酒米つき的小屋で、古老たちはいまでも当時の情景を懐しそくに語る。

取材班は六月上旬のある晴れた日に、この魚屋道を通って有馬へ抜けるハイキングを試みた。案内役は県山岳連盟副会長の山本吉之助さん(71)。山本さんは西堀栄三郎、今西錦司氏などと学生時代の同期生で、わが国山岳界の大先輩である。

九時三十分、住吉川上流の五助谷の堰堤を起点として出発。

久しく山にごぶさたしているせい、谷の左右に繁っている新緑が目にしみるし、澄んだ空気がめっぽうましい。ハナ唄でも出そうなほどのどかな気分になって、つい足取りも軽くなる。河原のあちこちにたき火の跡が見えるし、缶詰の空缶がころがっているところを見ると、ぼつぼつキャンプや飯盒炊さんにやってくる人たちもいるらしい。夏はもう目の前なのだ。

六甲山は京都における比叡山とならんで、夏季における避暑地として有名だが、大都市の背後にこれほど高くて深い山をもっている所はちょっとめずらしい。海拔千メートルに近い六甲連山が、海岸からわずかに四・五キロの地点に聳えていて、そこから流れ落ちる十数本の急流小河川が、神戸市街を南北に分断している。

神戸市と六甲山は実に切っても切れない関係にあり、いままでどれほどの恩恵を受けてきたか測り知れないものがある。



飛び石つたいに溪流をすすむ。

しかし、市街に密接しているだけに、細心の保護をしてやりませんとね、山の怒りがまともに市民の頭上に降りかかってきますからねえ。昭和十三年の山津波なんかがいい例ですよ。あのときはどえらいことでした」山本さんが當時を回顧する。

昭和十三年七月三日から五日にかけての大山津波の惨劇は、中年以上の神戸市民にとっては忘れることのできない記憶である。最大風速六〇メートル、三日間の連続降雨量六一六ミリという驚異の規模だった。六甲山の基岩である粗粒花崗岩は風化が激しく、いたるところで強度の浸蝕が行なわれて、しかも森林の濫伐によって吸水、保水の機能が貧弱になっていたから、雨と土石流は幾何級数的にその量をふやして流れ落ちた。

大木が根こそぎにされて押し流され、数百貫の巨石が市街地にころげ落ち、馬が立つたまま死んだ。この時の住吉川沿いの惨状は谷崎潤一郎の『細雪』にもくわしい。山本さんが六甲山に関わりをもったのはこの前後で、洪水後の山の整備復旧に寝食を忘れて取り組んだ。現在はこの河川にもおびただしく堤が築かれ、植林がなされているが、これらもみな山本さんたちの努力による。

谷を塞ぐようにして、巨大な石がいくつもころがっている。十三年の災害当時のものであろうか。谷幅がせばまるにつれて川床の石が粗くなり、きれいな水が涼しい水音をたてて流れている。

谷を離れて、けもの道のような灌木の茂みを登っていくと、高い木の梢からウグイスの声が聴こえてきた。啼いているのはオスで、さえずりは生殖活動と縄張り誇示の意味をもっている。啼き真似の上手な鳥だから、よい啼き方をする鳥がそばにいます。だんだん上手になるといわれています。声はすれども姿は見えずで、いくら目をこらしても姿をとらえることはできません。



六甲最高峰のテラポラアンテナ。ここより魚屋道を有馬へ下る。

澄んだ空気と山中の静寂が、ウグイスの声をいつそうひきたてる。都市の俗塵や騒音にいたぶられた耳には、大自然の神秘的な鈴音のようにしみこんでくる。まさに価値千金といおうか。こんな幽玄境が神戸のすぐ背後にあるということが信じられなくなる。いくども谷を渡り、茂みをくぐり、坂を登っていくと濃い花の匂いが漂ってきた。

花といえば、路傍に目につくのはまずヤマアジサイでツバキ、ムクゲとともに六甲自生の三銘花といわれている。花色や葉の形が変化に富んでいておもしろい。神戸の市花がアジサイというのもうなずける。

「これがサビタですよ。ノリウツギともいいますがね。この粘液を和紙をすくうときに使うからノリウツギといわれているようです」

山本さんが指さした花は、円錐形の白い装飾花をつけ

た清楚を感じて、よく小説や歌謡曲に登場してくる。薄暗い木の下道を抜け、クマザサをかき分け、流れのほとりのある木陰でひとまず休憩する。裸になって谷川の水で顔を洗い、体を拭く。ここまでくるとさすがに水がつかない風が涼しい。

不意に灌木の茂みをかき分ける音がした。イノシシでも出たのかと思って振り向いてみると、登山装備に身をかけた青年がひとり姿を現わし、目礼して追い抜いていった。今日はじめて出会った登山者である。本格的な夏山登山に備えてのトレーニングと思われる。たつたひとりで黙々と山中へ消えていく山男のうしろ姿には、孤独の中で自らを鍛えているきびしさとしたのしさのようなものが感じられて、かすかな羨望を覚える。

本庄橋を過ぎたあたりから、山容はがらりと趣を変えて、にわかにかきびしい表情をみせてきた。東お多福山(六九五メートル)、西お多福山(八七〇メートル)が見える。前方から電気ノコの音が聴こえてきたので顔をあげてみると、山の急斜面に登山者用の木棧橋架設工事が行なわれていた。

こんな山奥に、こんな橋がつくられているとは意外だった。そのことを口にする、山本さんは、「薬は薬ですが、自然のままの道がやはりいいですねとくにこんな皮をかぶった木材はよく滑るし、腐りやすいですよ。山の中をあまじりじりすぎると、山歩きのたのしみが半減しますな」と手きびしい。

八分通り完成した棧橋の上で一服する。米軍専用のテラポラアンテナが二基、山頂からぐつとこちらをにらんでいる。さつきまで頭上で啼いていたウグイスの声が、いまは左の深い谷底から聴こえてくる。山上の風はやはり涼しい。

出発後一時間経って、いよいよ魚屋道最大の難所といわれる「七曲がり」にさしかかった。道が細い上に傾斜がきつく、岩が突き出ている歩きにくいことおびただし

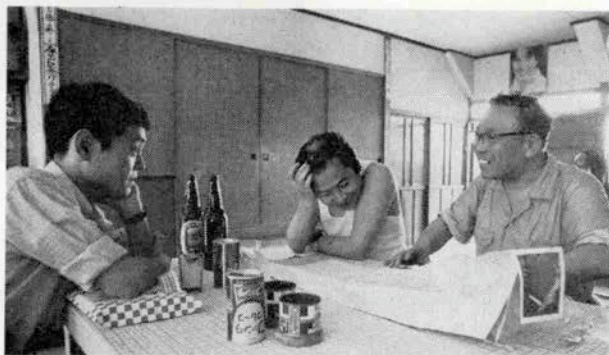
い。両手で木の根や岩角につかまりながらあえぎあえぎ登る。山に馴れない筆者は二十メートル登っては休み、三十メートル進んでは地べたにへたりこみ……と悪戦苦闘。それなのに七十一歳の山本さんは、終始同じペースで悠々と登っている。

それどころか、「おや、ホトトギスが啼いていますね」とのんびりしたものの。なるほど、何年ぶりに聴くホトトギスの声である。テッペンカケタカ、と啼くといわれているが、どう耳を澄してもそのようなは聴こえない。

ホトトギスは横着な鳥で、ウグイスの巣などに托卵して自分で子を育てない。ウグイスの母はそれとも知らず、自分の子のほうを犠牲にしてホトトギスを育てる。そのくせホトトギスの母親はずっと巣の近くにいて、ヒナの成長を見守っているという。もつとも、人間界にもちかごろこれに似た横着な母親がふえつつあるが……。

ところどころ、道路の崩れた跡が改修されている。所要所要には地名、方向、距離などを指示する標識が立ててあるし、誰の厚意なのか、傾斜のきつい危険個所にワイヤ・ロープが取りつけられている。全身汗みずくでよじ登る。口をきく元気もない。それにしても、こんな険路を、重い鮮魚や米を背負って往復した昔の人たちの健脚が信じられない。筆者など身一つ運ぶのがやっとのことで、とても重い荷物などかつけたものではない。

青息吐息でようやく難所を越え十二時半、頂上の一軒茶屋にたどりついた。



地図をみながら作戦会議。右より山本さん、筆者、編集部橋本。

昼食後、こんどは有馬へ通ずる細道を下る。登りにくくらべてこちらはすっと楽なので、もっぱら植物研究を兼ねながらのんびりと下ることにする。

素人目にもすぐわかるのはアカマツが多いことである。下生えの植物相も豊富である。見事なのは道沿いの斜面にすき間なく群生しているミヤコザサの大群。四季ごとに六甲の山容を変化させる原動力はこのササで、この季節は葉のふちが白く枯れて美しい。

濃緑の中から顔を出しているヤマアジサイの薄紫、真紅のヤマウルシ、幹がしたたるような緑色のウリカエデ。葉の大型なサイゴクミツバツジが見えるし、紅紫色の花をつけたモチツツジもある。実をつけたアセビも多い。「これがクロモジです。楊子に使う木ですよ。いい匂いがするでしょう」

山本さんがクロモジの小枝を掴み取ってくれる。皮をはいで鼻先に近づけてみると、何ともいえないよい香りがする。

下り道は勾配も手ごろだし危険な場所がなく、昔から「六甲六百草」といわれるほど草花の種類も多いから、子供をまじえた家族連れの植物研究を兼ねたピクニック・コースとして推奨できる。

あちこちに、黒と青の実をつけた植物が目につく。同じ一本の木に、松カサのように枯れた黒いざらざらの粒と、小型の栗のような青い実が同居しているので、ふしぎに思っただけでみると、ハゲシバリだという。

「別名ヤシャブシといましてね。砂防のために植林したものです。こいつを植えておくと、松の生成にもい

いんですよ。ですから、松といっしょに植えると効果的なんです」

いうまでもなく、山崩れや土砂の崩壊を防ぐための配慮である。ハゲシバリは表六甲より裏六甲のほうが成長がよいようだ。

道の両側にはやたらとイチゴが群生している。イチゴなどは子供のときに口にしたきりだから、何とも懐しく、両手で忙しくつまんで口に入れる。二種類あるなかで、真紅色をしたのはナワシロイチゴである。苗代を作る時に熟すのでこの名がある。赤くて美しいが酸味がきつい。黄色いクサイチゴのほうは、野生のイチゴ類ではない。ちばん早く熟するのでワセイチゴの別名があり、甘味があつておいしい。都会の子供たちを連れてきたらさぞよろこぶことだろう。これも山歩きの楽しみの一つである。

毎日この道を通つて、神戸、有馬間を通つた昔の行人たちも、道ばたのイチゴを口にしてわずかに疲れを癒やしたのかもしれない。

先頭を歩いてきた橋本記者が、不意に声をあげて立ち停まった。つづいて山本さんも足を停めた。何事が起こつたのかと駆け寄つてみると、道から二、三間離れた左手の谷側に、目を洗われるような見事な白花の一群が咲きほこつていた。

「山ボウシです、これが」

山本さんがうめくようにいった。

みずき科の植物で別名「山グワ」ともいわれている。花はぜんぶ葉の上に笠のように咲き、白色大形の総包片が頭巾に似ているので山帽子の名がある。白の四弁だが、よく見るとわずかに桃色がかつている。

道から眺めるとちょうど手ごろな高さである。枝をひろげた木の背後は深い谷、谷を隔てた向うの山と崖、その上にひろがる青く澄んだ空——それらを背景に、道から手のとどかなぬところにすつくと立っている山ボウシには、誇らしい気品があり、それでいて何ともあでやかなたたずまいなのである。



裏六甲の魚屋道を下る。有馬はもうすぐだ。

あまりの美しさに、一同は言葉を失なつて見惚れる。曇り日には、純白の花弁がいつそう鮮やかに浮びあがってくるという。

「これだから山歩きがやめられないんです。今日はこの山ボウシにめぐり会つただけで大収穫です」

植物好きの山本さんも、何回もこの道を歩いていながら今日までこの山ボウシには気づかなかつたという。

山ボウシに心を残しながら、眺望のよい尾根道の人びり進む。山ボウシに目と心を洗い浄められたあとは気がすがすがしく、足取りも軽やかである。

道はしだいに色が変わつて、石英粗面岩の石ころの多い白い道となる。

滑りやすいので足もとに用心しながら下つて行くと、何となく人里の匂いがし、遠くから車の音が聴こえてきた。谷のほうでカケスのギャギャと啼く声があった。びつくりして目をこらしてみると、樹々のすき間のはるか下の方に、ようやく有馬の町の屋根がチラリと見えた。

(次回は田園学校)

ひとつの時に生きる二人のための
ロンジン・ペアウォッチ



ロンジンのペア・ウォッチは二人の心を結ぶ
ロマンチックな時計です。

最も種類がそろっているロンジンのペアウォッチ
からお好みのタイプをお選びください。

LONGINES

特約店



美甲時計店

LONGINES

Ref. 8381 ¥47,000

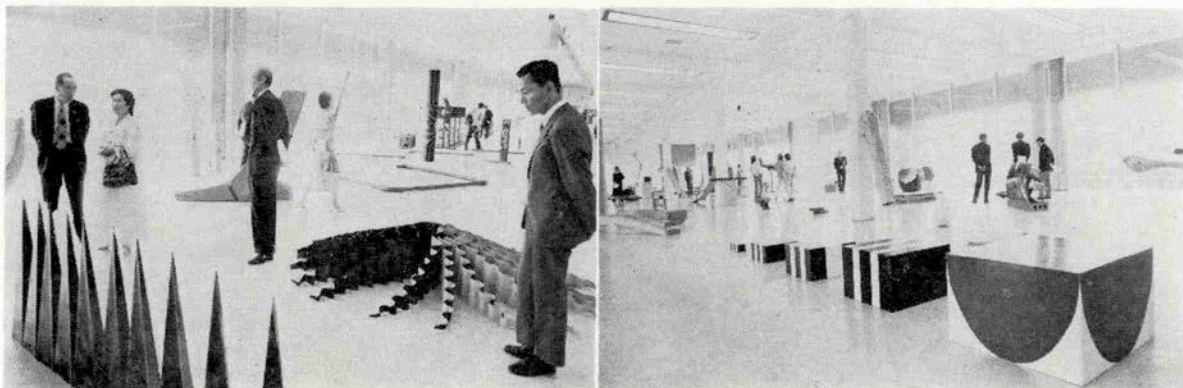
Ref. 8363 ¥47,000

元町店・元町三丁目 TEL.331-1798

三宮店・さんちかファンシー・タウン TEL.331-8798

★ 座談会／第2回 日韓現代彫刻展によせて

日韓芸術交流で心のつながりを



近代美術館の作品展示会場にて

〔出席者〕

崔 起源 <弘益大学校美術大学教授>
徐 進昊 <韓国日報社神戸支局長>
崔 南鎮 <韓国日報社大阪駐在特派員>

山口 牧生 <彫刻家>
増田 正和 <大阪芸術大学助教授>
井上 昭廉 <行動美術協会々員>
佐藤 廉 <元町画廊>

去る六月十九日から二十四日まで、兵庫県立近代美術館で第二回日韓現代彫刻展が開かれた。昨年からは始まったこの彫刻展は日本と韓国の現代彫刻家たちが、自主的に企画し開催するユニークなもの。

★作品で相互理解を深めよう

編集部 日韓の現代彫刻作家の交流のそもそものきっかけは？

増田 一昨年の七一年九月に、大阪芸術大学と浪速短期大学とが韓国古美術研究団というのをつくりまして、韓国の古美術を見学する機会を持って、その研究団に、飛び入りとして山口牧生さん、小林陸一郎さんが加わりました。その時にソウルで、弘益大学の朴栖甫先生と崔起源先生と我々三人とが、団体を離れてプライベートに話し合う機会があつて親しくなりましたね。また十一月に私が韓国へ行きます時「韓国の若い彫刻家たちと話しあいたい、アトリエも訪問したい」と前もって崔先生にお願いしまして、韓国現代彫刻会のメンバーと話し合ったわけです。その時に、隣りに住んでいるがらお互いの作品を知らんなあとということになって、彫刻家なんだから作品を通じてお互いに相手を知る必要があるんじゃないか、またそれが、友好を深め、本当の交流になるんじゃないかということ

「何かそういうことやろか」とな
って始まったわけです。そして、
七二年の九月にソウルのソウル画
廊で第一回交流展を持ち、日本か
らは十名、韓国からは十一名の現
代彫刻家が出品し、四十点余の作
品を展示しました。

編集部 それで今回が第二回交流
展ですね。

増田 今回は、韓国側から十名が
一人二点ずつ計二十点の作品を出
しています。でも、輸送の関係で
小さな作品だったので、日本側で
もみんなで相談して、どこか画廊
でと考えていたんです。たまたま
近代美術館でそんな話してしま
ら、事業課長の増田洋さんが「う
ちでやればいいじゃないか」と。

「お宅は広すぎる」というたんで
す。というのも最初の第一回展が
頭になりましたし、費用の問題が
ありましたから。画廊でしたら無
理を言えばタダにしてもらえな
い。でも、現代彫刻センターが費
用を持ってくれました。広い会場
でも、日本側から大きい作品を出
せばいいということで、話がまと
まりました。それに、協賛者の
交渉なんかは、佐藤さんが全面的
に協力してくださって……。

佐藤 私は、この交流展の最初か
ら話は聞いていましたし、非常に
いいことですからネ。



崔 起源さん

山口 私も、一昨年に増田さんと
飛び入りで同行したわけですが、
ソウルで作家と会った時、何とい
うか心からの握手がありました。
今まで日本人の考え方として国際
展というとすぐ海を飛び越してア



徐 進吳さん

メリカやヨーロッパへ行ったり、
その方面にはしきりと目が向いて
いるんです。しかし考えてみたら
一番近い所の隣の作家の状況をほ
んど知らない。これはおかしい
じゃないか。このことが交流展の



崔 南鎮さん

きっかけなんです。
去年はソウルで開かれたわけで
すが、私はよう行きませんでした、カ
タログで作品をみせていただきました。
した。

増田 去年はソウルへ日本側から
井上さんと東京の三浦重雄さんの
二人が、我々を代表して行ってい
ました。

山口 帰国後、井上さんからいろ
いろ話はお聞きしましたが、じか
にこの目では見てないわけです。
今回初めて韓国側の作品を見るこ
とができたわけですが、じかに接
してみると、僕らと同じ問題を抱
え、同じ次元で戦っている友達な
んですネ。そういう友達が隣りの
国にいたことを今まで知らなかつ
たというのは、慚愧に耐えんとい
うか、おかしいことだったという
気がしましたネ。

増田 遅過ぎたんですネ。この展
覧会が。もっと早くこういう企画
があってもよかったのじゃないか
と思います。

編集部 井上先生は去年ソウルへ
行かれていかがでしたか。

井上 初めてソウルへ行ったので
すが、迎えにきていただいても顔
の知らない人ばかりなので、写真
を持っていきましてネ。(笑)

ソウル画廊で展覧会がありまし
たが、韓国の作品は根強いとい
うか力強さがあった、圧倒されま

したネ。我々のややもすれば表面的な技巧とか小手先の仕事になりがちなのに対して、内面的な力強さを感じました。

佐藤 現代彫刻の分野でこのような交流が持たれたのは、ある意味で運がよかったというか、実現が早かったですね。絵画や他の部門でも、こういう文化交流が実現してほしいですね。

いつまでもアメリカやヨーロッパの後についていて、日本人は物まねがうまいからという美術雑誌を賑わしてはいけけないのであって、やはり日本人、東洋人としてものを創っていかなアキませんなあ。日本と韓国の作家がしっかりと手を握って、欧米をむこうにまわして、東洋の芸術を創っていつてもらわないと。

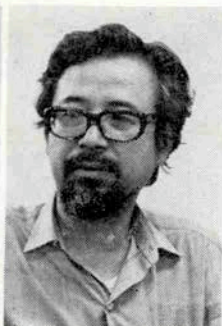
山口 しかし、残念なのは、はるばる韓国から十名の作家の力作がきているのに、一週間美術館で展示されて、そしてもう送り返さなきゃならん。見てくれる人はほんのわずかなんですね。これだけの展覧会だったら、大阪へもいき京都へもいき、できれば東京まで持つていって、みんなに十分みてもらえる価値のある展覧会だと思えますが。それは僕たちに力が無いということがあります、いろんな問題がからんでいると思うんですね。



佐藤 廉さん

編集部 韓国の方は、いかがですか。

崔(起) 私も韓国にいて、日本に



山口 牧生さん



増田 正和さん

同好の士がいることは知っていましたが、実際に作品は見れませんでした。作品をみて見たい意欲は



井上 昭さん

ありましたし、またそれによって自分も視野を広げるんじゃないかと思っていました。日本側の作家の方も同感であるということで二回も交流展が開かれたことに満足ですし、今後もそういうことが度々あってほしいですね。

徐 私は芸術分野はあまりくわしくありませんが、先程もお話にありましたように、今まで日本は欧米ばかり力が入って、近い韓国は見落されていきました。

これは、韓国の国内情勢が日本と違った立場におかれていたことと、欧米の文化が入りやすかったことが原因ですね。そんなわけでこの交流展は遅いようであったけれど、決して遅くない。

韓国においても、新しい国造りに馬力がかけられたところですから、こういう芸術分野においても、いい作品がどんどん出るんじゃないかと思えます。日本と韓国の作家の作品が一堂に会したことは去年が初めてですね。今後を楽しみにしております。そういう意味で、皆さんは立派なパイオニアですね。政治とかいうややこしいものは抜きにして、手軽な分野から開拓していつてこそ交流の意味があると思います。

★がむしゃらな作品が多いです

編集部 作品は日本にやってきたのですが、韓国の作家の方々の現状はどうなんでしょうか。

崔(起) 韓国で現代彫刻をやっている人は、非常に年代が若いです。平均三十代ですね。意欲に燃えています。日が浅いというか、若いために円熟というよりがむしろ少ないです。

山口 韓国で、たとえばアメリカの現代彫刻なんか、どんどん入ってきて展覧されるということがあります。

崔(起) 回数が非常に少ないです。日本からは始めてですね。ですから、現在神戸でしているこの展覧会に、本国の作家たちは強い関心を持っています。

佐藤 ということは、よほどしっかりフンドシをしてもやらないままへんなあ。

崔(起) 欧米からも入るのが少ないし、自分からも出ていく機会が少ないので、関心が深くなる。

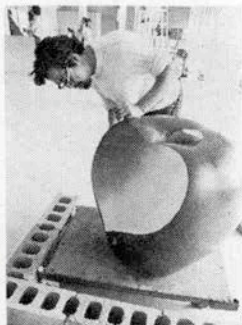
崔(南) 先日、韓国で具象絵画の展示会がありました。金鍾泌首相が見にいれました。金首相も非常に絵がお好きで、おひまがあれば写生に行ったりなさいます。首相は彫刻にも関心を持たれており公園で野外彫刻展示会を開かれています。最初は小規模でしたが、だんだんと学生を中心に広がり、若手を育成する意味で、その場で

彫刻とはどんなものかと、盛んにやっておるわけです。

増田 シンポジウムですね。

崔(南) 一般の人の関心もきつくりきつつけることができます。一国の指導者が関心を持たれているというところで、将来希望を持っていると思います。そんな事で、みんなが意欲に燃えているから、案内彫刻の方が早く韓国では伸びると思いますよ。

崔(起) 今年の七、八、九月にか



山口さんの作品「メルヘン」

けまして、児童公園で、大学のOBや講師、助教授、教授、それから彫刻絵画の専任教師の人たちが三ヶ月間、そこで最初の作品からスタートして展示します。そういうプランも練られています。

佐藤 その児童公園はゴルフ場を解放した所ですか。

崔(起) そうです。

佐藤 私はそこへ行きました。韓国のソウルにカンツリークラブがあるんですよ。町の真中に。それを今の朴大統領が児童公園にした

のですが。非常にいいことだと思いますわ。

それから、この交流展についてひとつ言いたいことがあるんですけど。それは、日韓彫刻展の韓国の受け取り方と、日本の受け取り方に非常に差があるということ。

やっていることは立派なんですけど、あまりにも周りが、特に日本の場合、経済重視の国のせいかなに関係のないことには非常に無関心なんです。ところが、韓国ではこの交流展が非常に大事なことであり、ひいては国の文化に密着していると考えます。金首相が非常に文化に理解のある人で、すし、バックアップが強いからです。日本はというと、作家どもが寄って、サイフのひもを解いて苦労してやっているなあというだけでしょう。これでは芸術が育ちませんよ。

井上 そうです。文化面において韓国には積み重ねてきた歴史がありますねえ。たとえば焼物なんか日本ではとういて到達できない。まず材料が違いますわ。今まで我々が韓国を知らなかったために、作品を理解することができなかったのじゃないか。みていけばもっともつとより深いものが今後出てくるんじゃないかと思えますよ。それに片言の英語がしゃべれても、韓国の言葉が全然しゃべ

れないというのは情ないことですよ。隣りの言葉が通じないという現実、やはり問題があると思うんですよ。

そのことも交流が浅かったために出てくる問題でネ。もつともつとつきあっていけば、我々の母型といえますか母体が韓国の作品の中にあることがわかる。我々もつと勉強していかなアカンという感じはしますねえ。

佐藤 この間、私、ソウルへ行ってきましたして、いろいろ見て回ったのですが、奈良の中宮寺にある国宝の弥勒菩薩のそのままの形が韓国にありましてね。年代をみると韓国の方が古い。韓国から日本にきてるんですね。とにかく原点が韓国にあるんですよ。

皆さん、勾玉をご存知ですか。これは世界でも、韓国と日本にしかないですよ。

増田 昔は、国と国というナシヨナリズムが無かったわけですよ。ただ間に海があるという地域と地域という感じだったんでしょね。琵琶湖の対岸通しが往来するような感覚で、韓国と日本は行き来してた。

佐藤 韓国と日本との交流は通かな昔から連続と続いています。

徐 先の話の仏像なんかもそうなんです、美術品をみていてもハツとするような同質性に驚きます。

佐藤 そういうことを考えてみると、昔は日本と韓国は完全な同族ですよ。我々が教えてもらった歴史というの、明治以後の歴史で勉強していますのね。

増田 非常に歪められていますね。

井上 それは、取ってしまったないカン。

増田 私が最初に韓国にいった時は、釜山に上陸しましてね。釜山から通度寺へ行つたんです。そこ



作品を展示する植松壺二さん

でもう感激しましてね。そのお寺

をみた時には、何ていうか日本の古いお寺の原形がそこにあるような感じがしましたね。ちょうどその時に、お坊さんが読経してたんです。その読経が静かな境内に流れましてね。写真を写しながら、録音機でも持ってくればよかったなあと思つたですね。読経の声と風鈴の音が調和して、そこで韓国へ来てよかつたという思いが強くなりました。

徐 心の故郷というのは韓国です

ね。日本は観光のお寺が多いですね。

山口 日本が戦後、もちろん悪いものを失うのは結構なんです、貴重なものも失ってきたということが韓国へいきますと痛切にわかりますね。封建的なものと絡みあっているから問題は複雑ですが、人間同士が生きていく原点にどうしてもなきやならん誠実さというか真心や思いやりを、韓国へいっただら感じます。

僕らの戦後の経済発展が、どんなに大きな犠牲の上になされてきたかということ、やっぱり思い出したね。

佐藤 だから、韓国の人は日本の悪いところを知っていたら、いいものを失っていただきたくないし、我々は何とかさういうものを取りもどすべく努力をしなきゃアカンということです。

増田 近代化の犠牲にどうしても払わなければならない代償として今韓国に残っている意味での素材があるんだとしたら、近代化というのを我々はしなくていいと思うんですよ。

徐 人間らしい生き方を取りもどさなければいけないということですね。

井上 ソウルの博物館の横でしばらくベンチに坐っていたのですが近くまでリスがくるんですね。ソ

て、専攻するところが同じであり、共通の目的はありましたが、一時間足らずの間に十年の知己のごとく胸襟をひらくことができたことは、非常にうれしい。

★我々は友達でなく、兄弟だ

井上 韓国に行きました時、最後にお別れのパーティがあったんですが、そこでひとつしやべれということですね。

日本の彫刻家と韓国の彫刻家とが、こうしてひとつの展覧会をやったわけですが、これはもう友達では困ると言ったんですよ。単なる友達でなく、兄弟だと言いましたね。

政治家だといろんな制約があつてむずかしいでしょうが、彫刻家というのは裸のおつきあいができますから。

佐藤 心の深いところで、結びついていくようにならないけませんよ。

増田 文化に少しでもたずさわっている人間にとって、国境はないですからね。

佐藤 それから、自発的に始まったこのような立派な交流展は、多くの人に見ていただいて輪を広げていきたいですね。芸術や文化を育てていく心が、日本と韓国の友好をより深めていくでしょう。みんな、灯を大きくしましょう。



オープニングの県立近代美術館で造形作家と在韓韓国人々

では年寄りからのんびりと余裕をもった生命活動を行なっています。

私が日本地下鉄に乗りました時、年寄りが立っていたのに誰も席をゆずろうとしないので私がゆずりません、みんなが私を見ました。

私はたまたまなくて、地下鉄を降りたんですが、どうしてこれだけ違うのかと、さびしい気がしました。

政府の取り決めや、政治経済の利害関係はいろいろとありますが、

このような彫刻の交流が灯となって、精神的なつながりをぜひ深めていってほしい。

韓国にくる日本人観光客の非難もあります。度外視して、これからは文化の交流にすべての力点をあかないかぎり、友好は深まらないのではないのでしょうか。

崔(起) 初めて皆さんにお会いし

ウルの中の真中でリスが住んでいます。日本だと、人のいるところにリスがきますか？

増田 釜山でもソウルでもそうでしたが、私が夏に行った時、公園の木陰で、白い韓国服の老人がゆったりと涼んでいる姿は本当にいいものです。

崔(南) おっしゃる通りに、韓国

潜り戸を通して
“花,,のおふくろさんの味を



和風季節料理

花

さんプラザ地階 TEL 331-0087

営業時間 AM11:00~PM9:00



呉服の粋

赤

坂

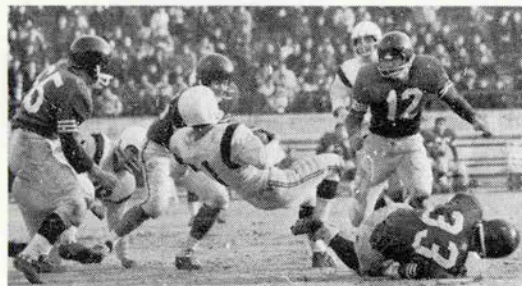
本店 神戸市生田区元町通六丁目
(341)五五一八・八六五三
大丸前店 神戸市生田区三宮町三丁目二二
(391)三一六四



神戸遊戯誌119



ボールをつかんでゴールへ走る



ブロッキングにもめげず……

★米田氏らが創設した「神戸ボウル」

次に神戸と最もなじみの深い「神戸ボウル」について書く必要がある。神戸ボウル（英語のBOWL、すり鉢のこと、変じてすり鉢型のフットボール場で行われる大試合のこと）は、前回紹介した現関学大アメリカン・フットボール部総監督の米田満氏が神戸新聞社在勤時代の昭和二十六年に神戸で初めてのフットボール・ゲームを企画、この名前をつけたものである。

この最初のゲームは、翌年の一月三日村野工業グラウンドで全兵庫高と全星陵高の間で行われ六対〇で全星陵高が勝った。両校の二チームを育成したのも米田氏らの努力によるものである。第二回からグラウンドは東遊園地に移り、その後磯上グラウンドからさらに王子競技場

へと移って今日にいたっているわけだが、この間の大きなビックはなんといっても昭和三〇年の第四回神戸ボウルのとくにオール神戸チームが作られたことである。

名実共に神戸の代表である同チームは同年手はじめにオール京都チームを招待して試合を行い、一四対〇で破った。その後各地の他チーム（オール大阪、オール奈良、オール池田、オール甲南）を迎えて対戦したが、第十四回大会にたった一回オール大阪に破れただけで、他は全部勝っている。本年の第二十二回大会（一月三日）でオール神戸は関西学生選抜と関西社会人選抜との連合チームを近差で破る快進撃きをつづけている。このように日本におけるアメリカン・フットボールの歴史はわが神戸を一つの中心として発達したといってもよいわけだが、府県別の現状をみると、神戸以外では東京、大阪、京都、神奈川県などが盛んである。ただ、幼少年層にまだまだ選

アメリカン・フットボール ③

青木 重雄

手が少ないことが問題で、高、中学校にチームがあるのは関西では十数校、東京では十校といったところ。底辺人口が乏しいことはなげきのタネである。本場アメリカでは国技だけにさすがに幼年から無数のチビッコ選手（八歳〜十一歳）に習わせており、少年フットボールの全国組織があるぐらいだから、日本チームがアメリカチームに勝てる日は当分来ないと言ってよからう。またアメリカ選手の現役年齢は長く、三十歳ぐらいまで可能であり、プロの名選手の中に四十歳ぐらいまでやっている人がいることも、比較的現役短命の日本選手が大いに学ぶべき必要がある。なお、アメリカン・フットボールをやっているのは、アメリカと日本以外は戦後に誕生した韓国（高麗大チーム）ぐらいのものである。

ところで戦争中に蹴球という名称がつけられたのは、あのいかにも全身を防具で固めたいかめしい姿にもってこいの名称といえる。これはアメリカン・フットボールの試合中最も危険性のあるプロッキングに備えて身を守るために作られたものである。プロッキングはフットボールだけにみられる猛烈な体当たりのことで、たとえば試合中ボールを取った選手を前進させるため、Aチームのその他の十名はこれをタックルしにくるBチームの一人一人にぶつかってゆくわけである。このプロッキングは手を使うことが禁じられているため、肩を相手に当てて倒すか、相手の走ってくるところに身を投げ出して相手をなぎ倒すのだが、この場合に考えられる危険を防止するためにフットボール選手はすべて頭にヘルメットをかぶり、肩や腰にも防具を入れたがいに体当たりしてもケガのないように備えているわけだ。ただプロッキングに関連した反則も決して少なくない。前に述べたようにプロッキングに手を使うことは禁じられているし、また後方から相手に当たるとも禁じられていて、こうした禁を犯した場合はいきびしく罰せられ、一五ヤード後退という場合も多い。一方この競技は肉弾戦といわれるほど肉体と肉体とのたたかいただけのように思われがちだ

が、じつはこのゲームの一番の見どころは一見プレーとプレーとの休止期間ともいわれるハドルのときにあるのである。なぜならこの時、両軍は互いに虚々実々の頭脳戦を展開しているわけであり、この駆け引きが直接試合の勝敗に結びつくのだから、観衆もハドルを楽しむようになれば、それこそりっぱなフットボール通といえるわけだ。とにかく多くの団体競技のうちでこれほど男性的で勇ましく、しかも精神的なたたかいかいにあふれたスポーツはないといえよう。

最後に、米田氏や三浦清氏（同志社大卒、現在関西フットボール協会副会長）が語る戦中のエピソードを二つ三つ拾ってみよう。戦争進展と共にアメリカン・フットボールは敵性スポーツとして軍部ににらまれついには解散させられたわけだが、これをなんとかして残そうと努力した関係者の苦心は並み大低ではなかった。たとえば三浦氏などは逆に海軍の兵士たちのスポーツに仕上げようと試み、その名も「海軍株闘球」と改めて実際に兵士たちに教えたものだ。昭和十六年に関学は津球技場で津海軍航空隊と試合をして一二対〇で破れている。従ってルールなどは第二義的で、あくまで兵士のファイトをおおるような方法で、相手をつかんだり、蹴ったりというものすごいスポーツとなった。また、昭和十七年頃には少年航空兵たちにも教え、少年航空兵チームと何回もゲームを行ったが、さすがに英語は使わず、当時の他の外国スポーツの場合と同様に「ブレイ」の代わりに「かかれっ」という合図で試合が始められた。西宮球場で関学が海軍少年航空兵チームとやった時、ヅカガールが花やかに応援してくれたことも思い出の一つである。アメリカン・フットボールの名称が戦前から今日にかけてさまざまに変化したことも興味深いが、戦前から戦後早々へかけて使われたことばに「アメ・ラグ」というのがある。いうまでもなく「アメリカン・ラグビー」の略称である。